法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

鈴木みどりさんの思い出 ： 市民としてFCTと出会えたこと

佐々木, はるひ

(出版者 / Publisher)
法政大学図書館司書課程
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究
(巻 / Volume)
3
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
19
(終了ページ / End Page)
22
(発行年 / Year)
2021-11
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025515

法政大学図書館司書課程
メディア情報リテラシー研究 第3巻1号、019-022

特集　「鈴木みどりとメディア・リテラシー研究：今日的意義、そしてこれから」
――思い出――

鈴木みどりさんの思い出～市民としてFCTと出会えたこと～

佐々木はるひ
特定非営利活動法人FCTメディア・リテラシー研究所

１．鈴木みどりさんとの出会い

子どもの通っていた幼児グループ（一般の幼稚園と同じ形態）では、「親子入園」という母親の学びの場（勉強会）がありました。学校を卒業してからしばらく「学ぶ」ことから離れていたので、読書会・講演会などはとても新鮮でした。卒園する 3 年目にはテーマごとに 6 ～ 7 名のいくつかのグループに分かれ、調査研究しまとめたものを発表します。

家庭内でのテレビとのつきあい方に、同じ疑問を持っていた母親同士で『子どもの遊び・おもちゃ・テレビ』を研究テーマにグループを作りました。まず幼児グループに通う全家庭に、遊び・おもちゃ・テレビなどに関するアンケートをお願いし、その回答をもとにグループで検証しました。すると多くの場面でテレビの影響を受けているのに改めて気づかされました。このときの調査研究内容は『fct GAZETTE No.37』（1990.5 発行）に掲載されています。

私は、日本でテレビ放送が始まった 1953 年生まれです。テレビとともに育ち常に身近な存在でしたが、つきあい方はずいぶん変わってきました。当時「子どものテレビの会」（Forum for Children’s Television）を主催されていた鈴木みどりさんのお名前を知る機会があり、講演会の講師をお願いしたところ快くお引き受けくださいました。これが最初の出会いになりました。（1990.2.6）講演会のあと、鈴木さんを囲んでの昼食会となり「近々『テレビ診断』をするので一緒にやりませんか？」と声をかけていただきました。勉強会の発表だけで終わるのではなく、これからが「学び」のスタートだと思っていたので、早速『テレビ診断』に加わることにしました。こうして私と FCT との関わりが始まりました。

２．市民としてのスタッフの役割

FCT で最初に取り組んだのは、報告書『テレビが映し出す「外国」と日本の国際化』（1991.9 発行）の制作への参加でした。まず調査対象のテレビ番組を録画することから始めました。そしてスタッフ会議で検討しなが分析に使うシートを作ります。CM と番組を各々録画したビデオを繰り返し見ながら記入し、これが分析するための基本となります。細かい作業の積み重ねでデー

タを出し、ディスカッションを繰り返し検証して報告書ができ上がります。作業をしていると、なんとなく思っていたことが実際は思い込みに過ぎないことや、繰り返し見ることで、今まで見えてなかったことが見えてくるといった新しい発見がいくつもありました。

毎回のスタッフ会議では、他にも当時年 4 回発行していた『fct GAZETTE』の編集会議、フォーラムの企画・運営、各方面から依頼される講座の準備など盛りだくさんでした。

FCT の事務所はなかったため、打ち合わせなどの会議はスタッフの自宅、女性センターのフリースペースを使っていました。各スタッフの自宅が事務所・資料の保管場所になっていたため、私の自宅でも、まだ馴染みのなかったワープロや FAX、プリントごっこなどの機器が増えてきました。FCT を知ってもらうため、ガゼット・報告書などを女性センターの図書コーナーに置いてもらえるように訪問しました。資料の紹介・頒布ができる講演会などに行くこともありました。

鈴木さんには、勉強になるからと市民講座などがあると声をかけていただき、ワークショップのお手伝いをしながら学ぶ機会を作ってくださいました。こういうときにはスタッフ会議とは違い、鈴木さんのお話をゆっくりと伺うことができ、貴重な時間が持てました。

これらの FCT 活動に市民としてボランティアで関わることができ、目に見えない多くの「学び」「知識」を得ることができました。この頃からは、FCT の会員係、ガゼットや報告書の発送などの事務的なことも担うようになってきました。

1994 年に、鈴木さんが立命館大学の教授になられてからは、関西方面にも行動範囲が広がりました。（最初の頃は、子どもが小さかったので、新幹線での日帰りも何回かしていました）行動範囲が広がると、人脈も増えてゆき、新しい出会いも多くなってきました。

FCT の名称も「子どものテレビの会」（Forum for Children’s Television）から「市民のテレビの会」（Forum for Citizens’ Television）に変わり、Citizens ＝市民としての FCT が生活の一部として、より身近な存在になりました。

３．GMMP (Giobal Media Monitering Project)

1995 年から 5 年ごとに世界各国で同じ日にメディアのモニターを実施する GMMP には、第 1 回から参加しています。第 1 回目のモニター日は、偶然阪神大震災の翌日になっていたので、録画をする準備ができていました。早速報告書を作ることになり『テレビと阪神大震災』（1995.10 発行）を制作することができました。

昨年は第 6 回のモニター調査が 9 月に実施されましたが、今回は初めて対面ですることができず ZOOM でのリモート会議になりました。

４．メディア・リテラシー

鈴木さんは、毎回スタッフ会議のときに、さまざまな本やパンフレットなどの資料を持参し、

常に私たちが地球規模の広い視野に触れる機会を作ってくださいました。その中の 1 冊がカナダの『メディア・リテラシー：マスメディアを読み解く』でした。まずこの本の日本語版を制作するための翻訳に取りくみ、リベルタ出版から 1992 年に出版することができました。その後この本を活用するための『Study Guide メディア・リテラシー・入門編』（2000.8 発行）、『Study Guide メディア・リテラシー・ジェンダー編』（2003.4 発行）の出版が続きました。この頃からはメディアの世界が広がり、その変化にそって、入門編はのちに新版（2004.12 発行）、最新版（2013.4 発行）を出版し、現在に至っています。

教材としては、イメージサイエンスよりビデオパッケージ【スキャニング・テレビジョン日本版】（日本語の吹き替えで制作）が 2003 年 3 月に完成しました。

さらに、1996 年 6 月にインターネットサイト『メディア・リテラシー研究所』（当時の名称は『メディア・リテラシーの世界』）を開設しました。パソコンや携帯電話の利用もこの頃からで、スタッフ同士の連絡や書類のやりとりも FAX や電話からパソコンが必須となっていきました。

５．FCTフォーラム

FCT では 1977 年の創設以来、5 年ごとの節目に開催する記念国際フォーラム以外にも、さまざまなフォーラムを開催してきました。フォーラムでの私の役目は、利用する会場の部屋を確保することから始まります。日時と場所が決まるとフォーラムの広報を進めます。

1997 年 9 月の創設 20 周年記念国際フォーラム「メディアと市民：日本とカナダの対話」は、東京青山にあるカナダ大使館で開催しました。このフォーラムの記録は『メディアと市民：日本とカナダの対話』（1998.11 発行）として出版されています。

６．研修セミナー

2000 年から『メディア・リテラシー研修セミナー』を開催しています。2 日間にわたり短期集中で行うセミナーには、毎年教師、学生、研究者、市民講座などの企画運営に関わる職員、メディア制作者・ジャーナリストなど多方面から、職業や肩書きを超えた市民として参加し、メディア・リテラシーのワークショップなどを通して学んでいます。

第 1 回から 15 回までのほとんどは、真夏の海水浴シーズンで賑わう江ノ島にある「神奈川県立かながわ女性センター」を会場にしていました。宿泊施設のあるここでは、合宿のように寝食を共にして、短期集中型のセミナーを実施しました。第 16 回目以降は江ノ島が利用できなくなったため、主に会場を東京と大阪で交互に開催しています。2019 年で 22 回目を迎えた研修セミナーも、昨年は ZOOM でのリモート研究会を 3 回開催することになってしまいました。今年も研修セミナーとしての開催は難しいため、秋に ZOOM での研究会を予定しています。

7．最後に

鈴木さんからは何回か海外にも一緒にとお誘いを受けていましたが、なかなか実現しませんでした。2005 年、鈴木さんが亡くなられる前の年に、フィリピンにご一緒できたことが、いまではよい思い出になっています。

これからも、鈴木さんとの出会いにより、多くのものの見方、考え方を得ることができたことを大切にしてゆきたいです。今でも何か疑問があると、「ここで鈴木さんならどうおっしゃるのかしら」と思うことがあります。きっといつも私たちのことを、どこからかみてくださっていることでしょう。これからも市民として FCT とともに成長してゆきたいと思っています。